

次の文章を読んで、あとの問1～問5の問いに答えなさい。

雅之君はこの木のすぐそばで、ヒルガオの群落を描こうと画用紙に向かっていた。梅雨にもかかわらず抜けるような空となった日曜日の昼下がりであった。^①縦横無尽に伸びたヒルガオの蔓は茂みを覆うように巻いていて、たくさんの真珠色の花を付けていた。

実はその時、雅之君は画板を抱えながらも絵が描けないでいた。ヒルガオの花が純粹な白ではないということはわかっていたが、限りなく白に近いその輝きを市販の絵の具でどう作っていくのか、その一点にこだわるあまり、^②前に進めなくなっていたのだ。白をベースに暖色系をわずかずつ混ぜてみたが、画用紙にのせると明らかに違う色になってしまった。どうしたものだろうと絵の具を見比べているうち、「おーい」と声がかかった。バンさんは笑いながら雅之君の横にきて、「何を描いてるんだ？」と覗き込んだ。^③

雅之君は正直に答えた。目の前のヒルガオを描こうとしていること。でも、花びらの色が出せそうにないこと。

バンさんは「ほう」と納得したような顔になり、しばらく雅之君のすることを見ていた。

「同じ色にしくたつていいんじゃないか」

「はあ……でも」

「絵なんだからさ」

「色を作れないのが悔しいですよ」

するとバンさんは雅之君のパレットに手を伸ばしてきた。

「混ぜるものが違うんだよ。別に、絵の具じゃなくたっていいんだ」

「え？」

雅之君は絵筆とパレットをバンさんに渡した。いつも通りのごつごつとした汚れた手でバンさんは受け取った。バンさんはヒルガオの群落のところまで歩いていき、数枚の葉をちぎって戻ってきた。指先でそれを潰し、緑の草汁を白い絵の具に何滴か垂らした。そして筆先でぐるぐると混ぜていった。

「これで描いてごらん。おそらくこつちの色だから」

思いもよらなかったこの色作りを、雅之君は口を半開きにして見ていた。こんな方法があるなんてまったく知らなかった。そして閉まらないその口からは、さらに「わっ」^③と声が漏れることになった。画用紙に筆を付けた途端、望んでいた色がそこに現れたからだ。

「すごい」

「絵の具だからって、他のものを混ぜちゃいけないなんて考えたらだめだぞ。石の粉を混ぜることもあれば、^{ちようりんぷん}蝶の鱗粉を使う時もある。なんだったわけだよ。方法は自分で開拓していけばいい」

すごいよ、すごい、すごい、と繰り返す雅之君の横で、バンさんは草むらにじかに腰を降ろした。あくびをしながら雅之君の描く絵を見ている。そしてごろりと横になった。陽射しが心地よかったのか、バンさん

はそのうち寝息を立て始めた。こんなところでバンさん……と雅之君は戸惑ったが、絵を描くのには邪魔になるわけでもないので放っておいた。どれだけ時間がたったのだろう。はっ、と息を吸い込むような音に続き、バンさんが咳払いをした。何も気付いていないふりをして、雅之君は折り畳み椅子に座り直した。筆に絵の具をつけ、再びスケッチブックに向かう。バンさんはしばらく何も言わなかった。何度かあくびをし、雅之君の隣でただじっとしていた。それからおもむろに「うまいなあ」とつぶやいた。

「何が？」

「いや、君の絵だ」

「でも……」

何か言われる予感がし、雅之君は振り向かなかった。

「そう。でも、なんだよな。うまいんだが、やつぱり見たままの絵だ。そういう方向でやっていくなら、それはそれでいい。だけど、うまい絵ということだけで競うなら、上には上がいる。世の中には写真と見紛うような絵を描く人がいるからな。どうだ？ この道で食っていこうと思ってるのか？」

さあ、と雅之君は首をひねった。それを考えないわけではなかったが、まだなんとも、というのが本音だった。

「まあ、ここで人生を決める必要もないんだけどな。ただ、君の絵はまっとう過ぎる。責任感が強過ぎるのかな。その分、視野が狭くなってる

んだ」

はあ、と雅之君。

「植物ってのは、こういう生き物なんだぞ。知ってたか？」

バンさんはよろよろと立ち上がると、ヒルガオの群落の横の茂みまで歩いていき、少し迷ってから背丈のある雑草を引き抜いた。川砂の下からずると長い根が出てきた。

「地下で頑張っている足腰の方が大きいだろう。それなのに絵描きは、いつも上半分しか描かない。もし君が見たままを再現する絵描きになりたいのなら、一度根まできちんと細密画でやってみな。それはそれで目が新しくなる。そうやって自分のスタイルつてものを探す旅に出るんだよ」バンさんはそれだけを言うと、何度か背伸びをして「うおーっ」と意味不明に唸った。

「楽しんでな、頑張れよ」

雅之君が「はい」と答えると、バンさんは鼻歌でメロディのようなものをなぞりながら遊歩道の方へと歩いていった。雅之君は小さな声で「どうも」とささやき、去っていくバンさんの背中に向けてぺこりと頭を下げた。

雅之君の足下に、バンさんの抜いた雑草が残された。

ヒルガオの花びらはどうでもよくなっていた。雅之君のなかで、植物そのものの印象が変わっていた。これまで自分が強調しようとしていた植物の可憐さはどこかに消え、生々しい生き物としての存在感が迫って

きた。草の根の形なんて知り尽くしていたはずなのに、少し視線を変えただけで、まるでこの星に潜んで生きるため、姿を変えた宇宙生命体のようにも見えるのだった。

新鮮だった。意図的に^(注)デフォルメしてもいいから、雅之君はこの感じ、この方向で植物を捉え直してみようと思った。

あきかわてつや
(明川哲也「大幸運食堂」による)

(注) デフォルメ：絵画・彫刻などで対象を意識的に変形して表現すること。